



◆ 8割が語検 3級以上を取得

埼玉県西部地区の約20万件に天然ガスを供給している武州ガス（本社・埼玉県川越市、原 敏成・取締役社長、従業員218人）は、業務を通じてお客さまと接する機会が多く、公益事業に携わる企業の社員に相応しい素養を育むために、日本語の正しい使い方を学ぶことができる日本語検定を導入しました。団体受検の導入4年目にして3級以上の認定を取得した社員は8割に達しています。導入前に試しに受検したメンバーの一人でもある社長室人事グループマネージャーの山代晃央氏に日本語検定を導入した経緯や成果などを伺いました。

（時事通信社編集委員 升谷 昇）

<日本語検定の団体受検を導入したのはなぜですか>

A. 「ら抜き言葉」に代表される日本語の乱れやコミュニケーション能力の低下が心配される中で、日本語検定が実施されていることを知り、3年前に私を含めた人事グループの有志が試験的に受検しました。その結果、敬語や語彙、漢字など日本語の正しい使い方を包括的に学ぶことができる、実務に有用な検定であることが分かり、2010年に取得を奨励する公的資格として決めました。



日本語検定は会社全体の良い刺激になっていると語る山代晃央マネージャー

<公的資格の取得奨励制度とはどのようなものですか>

A. 当社では、ガス事業に関連する資格のほか、事務処理能力や社会人としての教養を高めってもらうために幅広い公的資格の取得を社員に奨励しています。社員には目標を立てさせて進捗状況を面接で確認しています。公的資格を取得したときは、ポイント化して累積し、昇格の条件にするとともに、取得一時金を出しています。ガス主任技術者などの資格とともに、日本語検定3級以上を入社から5年以内で取得するよう奨励しています。

<受検者の反応はいかがですか>

A. 2010年11月に団体受検を導入してからの3年間（計6回）で社員の77%は語検3級以上の認定を取得しました。入社5年以内の若手社員に限ると83%になります。若手だけでなく、多くのベテラン社員も認定を受けており、会社全体で良い刺激になっていると考えています。一方で、なかなか認定が得られず、何度もチャレンジしている社員もおり、認定が得られるレベルに引き上げるにはどうしたらよいかジレンマを感じています。「読む、書く、話す」といった言語能力は、小さい頃から培った基礎能力がものを言いますから一朝一夕では身に付きません。

<企業にとって日本語の役割や必要性をどうお考えですか>

A. お客さまやお取引先と毎日のようにやり取りしていますが、文法や敬語が正しく使われていなければ、企業の信用や信頼が失われることとなります。言葉遣いや接遇に関するお客さまの声などから、日本語の難しさやコミュニケーション能力の重要性を再認識したこともあって、武州ガスグループ全体で正しい言葉遣いなどのマナー研修にも力を入れています。

<日本語検定に対する期待や要望をお聞かせください>

A. 最近、漢字や送り仮名はパソコンが変換してくれるので、自らの手で文書を書くことが少なくなりました。しかし、社員が正しい日本語を使えるかどうかは、企業の社員教育やお客さまを大切にする姿勢を表す重要なものだと考えています。日本語検定は正しい日本語の使い方を学ぶ良い機会となっています。認定を受けたことを誇りに思えるような、社会的な評価の高い検定となることを期待しています。